

「ドーン！ドーン！」。新緑の
渓谷に、力強い発破の音がこだま
します。昭和28年（1953年）

4月16日。この日、日本の

水力発電の新時代を開い
た佐久間ダム建設工
事がスタートしました。

「佐久間ダムは、映画やT
Vドラマで有名な黒部ダム

の試金石と言われています。佐久
間ダム建設で導入された国内初の
機械化技術が、昭和38年（1963
年）竣工の黒部ダムでも大活躍し
たからです」。佐久間ダム・発電所
を管理する電源開発佐久間電力
所の沼田徹夫所長（写真）は、こ
のように語ります。

佐久間ダムはコンクリート重力
式ダムで、高さはおよそ155メー
トル、堰堤の長さはおよそ294
メートル。当時としては日本最大
の規模でした。電源開発は、この
巨大なダムをわずか3年で完成さ
せるため、突貫工事を開始しまし
たが、目の前には大きな壁がいく
つも立ちふさがっていました。

まず、建設地点は険しい山間部
で、当時は交通が未発達。工事の
前に、まず道路を作ることが必要
でした。また、ひとたび氾濫すれ
ば毎秒1000トンもの水量が発



わが心の浜松

昭和31年

水力発電の新時代を開く 佐久間ダムの営業運転開始

生ずる天竜川の流れも難敵。工事
中、この水を迂回させるため、直径
10メートルのトンネル式バイパス
を2本通しました。

トンネル工事で活躍したのは、
ドリル・ジャンパーという大型の掘
削機械。ドリルを20本近く装備し
たこの機械により、長大なトンネ
ルを数カ月で掘り抜きました。

「工事では、それまで日本にな
かったブルドーザー、パワーシヨベル、
ダンプトラックといった米国製の
大型機械も導入しました。その威

力に驚いた日本の建設会社は、そ
の後、建設機械の国産化に取り組
み、これによって日本の建設技術
は世界トップレベルへと飛躍した
のです」。こうした工事の末、佐久
間ダムは昭和31年（1956年）4
月から発電を開始。戦後復興期の
日本に、貴重な電力を供給するよ
うになりました。「水力は無限でク
リーンなエネルギー。佐久間ダム
では今後も、電力の安定供給を続
けていきます」と沼田所長は話し
ています。

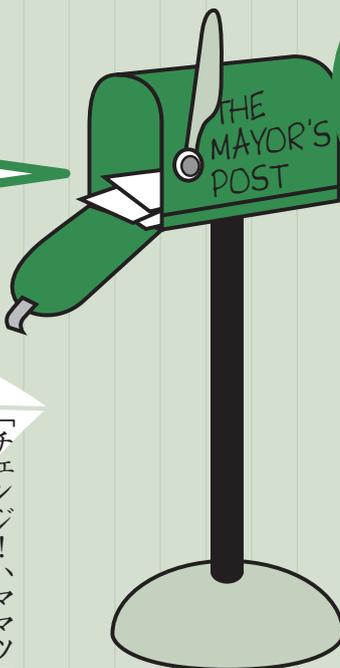


昭和28年から3
年間で建設された
佐久間ダムの工
事現場



医療費改革の実現を期待

市長への手紙



前号で特集した「浜松の医療」には、優れた点が数多くある一方、解決すべき課題もあります。今回は、そうした課題の一例を指摘する東区在住の方からの手紙を紹介します(誌面の都合で内容を一部編集しています)。

「チェンジ!ハママツ」第3号を拝見しました。

わたしは、下の子を妊娠中に中毒症にかかり、500グラムにも満たない低体重で出産してから、子どもの医療、とくにNICU(新生児集中治療室)にまつわる話には敏感になっています。

子どもは障害者手帳をいただくほど重症ではありませんが、やはり通院回数は大幅に増えています。

浜松は、救急医療体制は恵まれているかもしれませんが、子どもの医療費補助が現状のままでは、経済的負担が増えるので大変心配しています。

以前、市長のお話として、子どもの医療費の改革についての記事が掲載されていたらと記憶しています。

ぜひとも、そうした医療費改革を実現していただき、今後は「より暮らしやすい浜松」になっていくことを、心から期待しております。

(今回は「浜松の森林づくり」をテーマに、市長への手紙を
広聴広報課まで郵便、ファクス、電子メールでお願いします。
字数は300字程度。匿名でも構いません。住所などは裏表紙に記載。締め切りは平成21年8月31日)

※当コーナーへ寄せられた主なお手紙は次回の誌面で紹介させていただきます。なお、個別に回答はいたしません。

特集タイトルの由来

わが谷は緑なりき

How Green Was My Valley

(1941年制作の米国映画)

緑豊かな浜松の 山々は永遠に

20世紀を代表する巨匠、ジョン・フォード(1894~1973)が監督した「わが谷は緑なりき」。英国・ウエールズ地方の炭鉱町を舞台に、炭鉱で働く一家の人間ドラマを描いています。映画では、一家が愛した緑の谷は炭鉱開発で荒れてしましますが、「浜松の森林は決して荒廃させてはならない」。そんな思いを今回のタイトルには反映させています。